

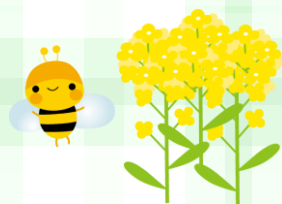
各居宅サービス担当者様

# うえるびーいんど

平成28年 4月16日

第308号

ウェルビーイング (well-being) 身体的にも精神的にも社会的にも良好に「その人にとってより良く生きていく」ということを意味する言葉です。この紙面において、医療・介護に関する情報をお伝えしていければと思っています。



## がん患者が最期を迎える場所について考える

日本人の2人に1人が「がん」になり、3人に1人が「がん」で亡くなる時代。特に50歳から75歳までは約半数が、「がん」が原因で亡くなっています。もはや、「がん」は国民病といっても過言ではなく、テレビなどでも、がん保険のコマーシャルをよく見かけます。

もし、近しい人が「がん」と診断され、限られた余命を過ごす時、どこで最期を迎えたいでしょうか？少なくない人が「自宅」と答えるのではないのでしょうか。

しかし、治療設備のない環境で過ごすことで、寿命を減らしてしまうのではないかと心配がでてきます。家族や医療従事者としても、本人が自宅で療養したいと希望した際に、受け入れるべきか否か判断が難しいのではないのでしょうか。

筑波大学と神戸大学による研究グループが、がん患者が自宅で過ごした事例と病院で過ごした事例では、どれくらい生存期間に差があるか検証を行いました。検証は、国内の医療機関58施設の緩和ケア病棟に入院した患者や、在宅緩和ケアを含めた何らかの緩和ケアを受けたがん患者2,069名を対象に行われています。

その結果、余命が「2週間以内」と診断されたグループでは、自宅で亡くなった人の生存期間が平均13日間だったのに対し、病院で亡くなった人は平均9日間。余命が「15日以上55日以下」とされたグループでは、自宅で亡くなった人の生存期間が平均36日間だったのに対し、病院で亡くなった人が平均29日間と、どちらも自宅での療養を選んだ方が生存期間が長くなっています。一方、余命が「56日以上」とされたグループについては、違いがほとんどみられなかったということです。

また、自宅で亡くなった患者は、病院で亡くなった患者よりも点滴や抗生剤の投与といった治療行為が少ないことも分かりました。

研究グループによると、今回の調査結果には、症状の重症度や家族の支援体制などの要素が織り込まれていないため、一概に自宅の方が長生きできると結論づけることはできないとしています。しかし、「がん」において自宅で療養することは、決して寿命を短くするものではないということを示しており、退院して自宅に戻ることに対する、患者や家族の不安を和らげる材料になるのではないのでしょうか。

通所リハビリから訪問診療まで  
在宅サービスのことは、何でもご相談下さい。  
在宅で生活していく皆さんを応援します！



## 春日部厚生クリニック

TEL 754-4313  
介護連携室 根岸